

傾斜を軸とするセデック語パラン方言の民俗方位*

落合 いずみ[†]

京都大学

【要旨】台湾オーストロネシア諸語における方位表現は地形を基にした上方・下方という表現を用いる例がしばしば見られる。また、台湾を南北に走る中央山脈が方位表現の違いを生じる原因だともされる。本稿では、台湾オーストロネシア諸語のうち、セデック語の民俗方位に関する語彙を異なる時代の6つの文献から集約し、筆者の調査によるデータも付け加え、傾斜という地形が方位表現の軸であることを述べる。さらに、セデック族の移住によって民俗方位の表現がどのように変わったかも探る。

【キーワード】台湾オーストロネシア諸語 セデック語 地形 方位

1 オーストロネシア諸語における方位—先行研究

Swellingrebel (1960) はインドネシア諸地域において「内陸方向」と「海の方向」を表す語が東西南北に援用されていることを述べている。例えば、スラウェシ島の南西に位置する、南北に長い半島の西側で話されるマカッサル語 (Makassarese) では、*raja* 「内陸」を「東」の意味にも用いる。この半島の東側で話されるブギス語 (Buginese) では、同源語である *?aja* は、「西」の意味に用いる。スラウェシ島を南北に流れる川の南側で話されるトラジャ語 (Toraja) では、同源語である *da?a* を、「北」の意味に用いる (図1)。この「内陸方向」に対立するのが「海の方向」である。バリ語 (Balinese) では、これらの対立を *kájǎ* 「内陸方向 (< *ke-?aja*)」と、*kělod* 「海の方向

* 本稿は、言語記述研究会第67回例会 (2015年11月8日、京都大学) における発表原稿を補足・修正したものである。林範彦氏をはじめ、ご助言いただいた方々に感謝申し上げます。しかし、本稿の不備は全て筆者の責任である。

[†] ochiai.izumi.6v@kyoto-u.ac.jp

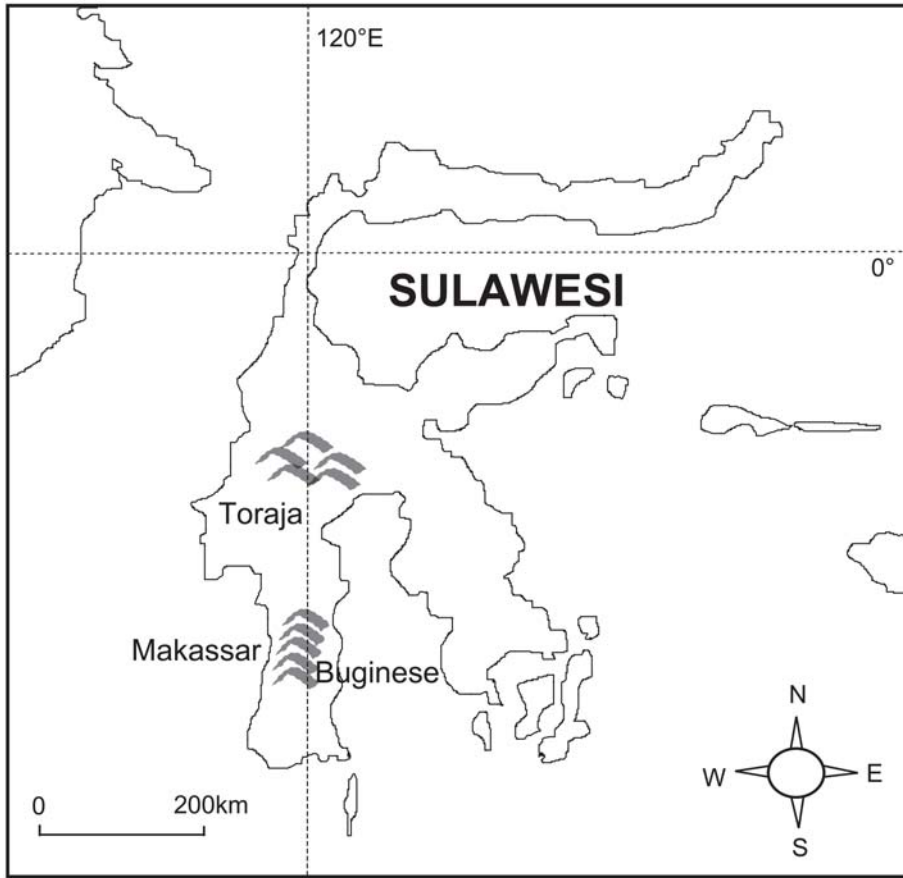


図1 スラウェシ島と各種族の位置

(*< ke-lod*)」で表す。前者は接頭辞 *ke-* と、*ʔaja* 「内陸方向」からなり、後者は接頭辞 *ke-* と、*lod* 「海」「川下」から成る (Swellingrebel 1960)。同源語は、倉田 (1972) に記録されたブギス語 *laoe* 「海の方角」、マカッサル語 *lâoe* 「海側」のほかに、インドネシア語 (Bahasa Indonesia) *laut* 「海」があると合田 (1977:271) は述べている。二つの方向はそれぞれ、Dempwolff (1938:42) によって、オーストロネシア祖語 (Proto-Austronesian, PAN) の **daya* 「内陸方向」、**laud* 「海の方角」と再構されている。本稿では、Blust and Trussel (2013) によるオーストロネシア祖語再建形 **daya* と **lahud* を用いる。

インドネシア諸地域の十数言語で「東西南北」を調べた Adelaar (1997)

においても、この二つの方向表現が、方位の基軸であり、これらを基に他の表現が派生されることを議論し、オーストロネシア社会における「内陸方向」と「海の方角」の重要性を示した。

台湾オーストロネシア諸語における方位名称を調べたのが移川 (1940) である。移川は 15 言語 (アタヤル語 Atayal、セデック語 Seediq、サイシヤット語 Saisiyat、ブヌン語 Bunun、ツォウ語 Tsou、ルカイ語 Rukai、パイワン語 Paiwan、プユマ語 Puyuma、アミ語 Amis、パゼツヘ語 Pazeh、バブザ語 Babuza、タオカス語 Taokas、シラヤ語 Siraya、カバラン語 Kavalan、バサイ語 Basay) から東西南北に当たる語を収集している¹。これらの言語の東西南北を調査した結論として、東西を表す語を持つ一方で、南北を表す語に欠けることが多いと言う。移川が「臺灣を南北に縦走する中央山脈の存在が、方位名称に相異を来さしめる一因となつてゐる。」と示唆するように、南北に欠け東西を持つ理由は、南北に走る中央山脈を有する台湾特有の地形に起因する。

本稿の目的は、セデック語パラン方言において移川の観察を再検証することである。セデック語パラン方言の民俗方位について言及のある 6 つの文献を調べ、最も古い文献の 1874 年から現代に至るまでの民俗方位の語彙を概観する²。その上で、インドネシア地域の「内陸方向」「海の方角」と同源語である「上手^{かみて}」「下手^{しもて}」という地形を表す語がセデック族の民俗方位の軸として用いられることを述べる。移川が観察したように、民族の移住によって方位表現が変わることがあることも、中央山脈を越えて移住したセデック族の語彙に見出せることも紹介する。

¹ ヤミ語 (Yami) も調査している。ヤミ語が話される島は行政的に台湾に属するが、ヤミ語はマラヨ=ポリネシア系の言語である。

² 「民俗方位」について、倉田 (1972:123) は次のように説明する。「複数の民俗社会に見出される‘民間の常識’であり、その社会のみ通用する「物指」であり、経験的な知識が基礎になって、独自の「空間」を創造し、個別性、独自性のある「空間」の位置づけを指しているのである。」羅針盤などで決定される科学的な方角とは異なる方法によるというのが重要な点である。

2 セデック語パラン方言の系統

セデック語は台湾で話されるオーストロネシア諸語である。台湾のオーストロネシア諸語は、20 数言語あったとされるが (小川 1944)、オランダ植民時代に始まる漢族の流入により 17 世紀から現在にかけて半数が消滅し、現在では山地に分布する 10 数の言語が話されるのみである。台湾オーストロネシア諸語内部の系統については研究者によって意見の食い違いがあるものの、本稿では Blust (1999) に従い、オーストロネシア祖語から最初に分岐する 10 言語群のうち、9 語群が台湾諸語であるとの立場を採用しておく。残りの 1 語群がマラヨ=ポリネシア祖語である。マラヨ=ポリネシア祖語に発する言語 (台湾以外のオーストロネシア諸語のすべて) は、フィリピン、インドネシア諸地域に始まり、太平洋・インド洋をまたがる広域な範囲に分布する。祖語から最初に分岐する語群ひとつが、アタヤル語群 (Atayalic subgroup) である。ここには、アタヤル語とセデック語が含まれる。セデック語は、小川・浅井 (1935) によると、霧社方言とタロコ方言の二つに分かれる (タロコ方言には、タロコ支族系集落とトダ支族系集落の二つが含まれることになる)。

3 祖形 **daya* と **lahud* —セデック語パラン方言にて

オーストロネシア祖語の **daya* 「内陸の方向」は、セデック語パラン方言において *daya* と反映される。筆者の調査では、現代パラン方言において、傾斜のある土地の高い方面を *daya* と呼ぶ。目に見えない場所でも、その場所の海拔が話者のいる位置より高ければ *daya* を使って表す。オーストロネシア祖語においては、海と陸が方位表現の根底にあるが、セデック語における *daya* は、海が存在を示唆しない。これは、セデック族パラン支族の住む土地が海に接していないことに由来するだろう。「海」という語を表すにも *gucilun* 「水溜り」、「池」、「湖」を使って複合語を作らなければならない (例: *gucilun timu* 「塩の池」³、*gucilun paru* 「大きい池」)。こ

³ Bullock (1984) に同等の表現が記録されている。

のことに、海との疎遠さが現れている。また、「上流」という言い方であるが、筆者は2007年から断続的にはあるが、9年間セデック語を調査してきたにもかかわらず、この概念を表す語を得たことがない。移川(1940)によると、セデック語パラソ方言において *daya* が「上流」をも意味する。しかし、筆者の調査の限り、*daya* に「水の流れ」についての含みはないようである。川が上方から下方に流れることを鑑みれば、*daya* の示す方向が「上流」方向を指すのは当然である⁴。

オーストロネシア祖語 **lahud* の、現代セデック語パラソ方言の反映形は *hunac* [hunats] である⁵。この語はちょうど *daya* の対極にあり、高低差のある土地の低い方面を指す。祖語とパラソ方言の形式は一見関連がなさそうだが、パラソ方言内部の再建により、セデック祖語は **rahut* と建てられる。この語はセデック祖語から音位転換と語末の音変化、*r* から *n* への変化を経ている (Ochiai 2016:317) ⁶。以下で音韻変化の過程を説明する。

現代パラソ方言では、*tugu-hunac* と *tugu-rahuc* 「低いほうへ」の二つが、自由変異の関係にある (*tugu-* は方向を表す接頭辞である)。また、*tu-rahuc* 「もっと低いほう、別の方向の低いほう」という表現もあり (*tu-* はここでは、「より遠いほう」という意味を表す接頭辞である)、この場合は *tu-hunac* とすることはできない。前者の *rahuc* であるが、語末の *ts* は *t* に由来するため、⁷早い段階では *rahut* と再建される。そうになると、オーストロネシア祖語 **lahud* との関連は規則的音変化 (PAN **l* > Seediq *r*,

⁴ Adelaar (1997) によると、**daya* 「内陸方向」と **lahud* 「海の方向」が、陸地に囲まれた土地において、「上流」「下流」という意味に変わることがあるとの指摘がある。

⁵ 現代セデック語パラソ方言の表記の方針について述べる。現代セデック語パラソ方言の音素は母音が5つ、*a, e, i, o, u*、半母音が2つ *j, w*、子音17個 (*p, b, t, d, ts, k, g, q, s, x, h, l, r, m, n, ŋ, ?*) がある。これらを表記に用いるが、異なる点は /*j/* は *y*、/*ts/* は *c* を用いるところである。また、語末に二重子音 *ui* (表記は *uy*) がある。

⁶ 語中で *r* から *n* へという音変化を経たパラソ方言の形式は、現在のところこの語しか例がない。しかし、1920年代以降に、語末の *r* が *n* になるという類似の変化が起きている。

⁷ 楊 (1976) は、*t* が語末で *ts* になることを共時的に説明している。

PAN 語末 **d* > Seediq *t*) で説明される。恐らく、セデック祖語 **rahut* から、第一音節の *ra* と第二音節 *hu* の音転移 (*rahut* > *hurat*)、*r* の *n* への変化 (*hurat* > *hunat*) が起こり、*hunat* に変わったことになる⁸。

4 セデック語パラソ方言の民俗方位

4.1 Bullock (1874) における霧蕃語

本文献は台湾オーストロネシア諸語のうち、水蕃語 (サオ語)、熟蕃語 (パゼツヘ語)、霧蕃語 (セデック語)、平埔蕃語 (シラヤ語)、卑南蕃語 (プユマ語) の 5 言語を実地調査し、179 語をリストとして挙げている。Bullock (1874) による霧蕃語をセデック語パラソ方言と同定したのは Asai (1953:1-2) である⁹。このリストの 157 番から 160 番までが順に北、南、東、西である。表 1 では、Bullock (1874:48) の霧蕃語と現代パラソ方言での対応形、セデック祖語の形式を示す。以下、現代パラソ方言の形式は筆者の調査による。

表 1: Bullock (1874) における東西南北

霧蕃語	現代セデック語パラソ方言	セデック祖語
<i>tungarēt</i> ¹⁰ 「北」	<i>tugu-narats</i> 「右へ」	* <i>taga-narat</i> 「右へ」
<i>tagaēril</i> 「南」	<i>tugu-irin</i> 「左へ」	* <i>taga-iril</i> 「左へ」
<i>daia</i> 「東」	<i>daya</i> 「上手」	* <i>daya</i> 「上手」
<i>hunat</i> 「西」	<i>hunats</i> 「下手」	* <i>hunat</i> 「下手」

まず「北」であるが、霧蕃語の形式は **taga-* という接頭辞と、**narat*

⁸ 埔里盆地付近に住むアタヤル系の人々が「ムラウツ」と呼ばれたという記述がある (移川・宮本・馬淵 1935:76)。「ムラウツ」は、*mu-rahut* 「低いところの人」と解釈できるだろう。それに対して、霧社のセデック族は *tugu-daya* 「高い方面に住む人々」と呼ばれる

⁹ セデック語パラソ方言とセデック語タロコ方言の形式の比較により、霧蕃語がパラソ方言であると同定した研究に Ochiai (2016) がある。

¹⁰ 千田俊太郎氏から、*n* と *g* を逆に書き写したのではないかと、ご指摘いただいた。*g* が *n* の前に来ることで、現代パラソ方言と一致する。

「右」という語から成る。接頭辞 **taga-* は、現代パラソ方言では強勢音節前の母音中和 (*u* への中和) が起こるため、*tugu-* になる。この接頭辞は、方向「～の方へ向かって」(*tugu-daya* 「山の上へ向かって行く」) やその方角の人々 (*tugu-daya* 「山の上の方の人々 (セデック族パラソ支族の別名)」) を表す¹¹。セデック祖語 **narat* 「右」は現代パラソ方言では、語末の *t* の *ts* への変化を経て、*narac* [narats] となる¹²。「北」という意味を表す語として、Bullock が得たのは「右の方」という意味であったことがわかる。霧蕃語の「南」は、接頭辞 **taga-* と **iril* 「左」から成る¹³。「南」という意味を表す語として、Bullock が得たのは「左の方」という意味であったことがわかる¹⁴。「東」の霧蕃語は、まさしく *daya* 「上手」の反映形である。「西」は「下手」である。霧蕃語の東西南北は上手、下手、左、右という表現を用いていることがわかる。

4.2 伊能 (1996) における後山蕃語

伊能嘉矩は、1897年の5月から12月まで当時の日本政府の要請を受けて、台湾先住民族の人類学的調査に従事したことがある。その際に日誌として記録していたフィールド調査ノートが、伊能 (1996) として中国語に翻訳され出版された。本書によると、霧社 (セデック族パラソ集落) には1897年の8月26日から31日までの6日間滞在していた。

伊能はこの地の先住民を北蕃と呼んでいる。北蕃とはアタヤル系支族全体を指す言葉であり、アタヤル系アタヤル族とアタヤル系セデック族が含まれる¹⁵。伊能は、アタヤル系アタヤル族とは異なるという意味で、「後山

¹¹ ほかに、*tugu-* という接頭辞は身体部位の露出「～を出す」(*tugu-puyaq* 「臀部を露出する」、*puyaq* 「臀部」) を表す用法もある (落合 2016:172-173)。

¹² オーストロネシア祖語の「右」は **wanaN* と再建されている (Blust and Trussel 2013)。セデック祖語と関連するだろうが、反映形に至るまでの音変化については今後の課題とする。

¹³ オーストロネシア祖語の「左」は、**wiRi* と再建されている (Blust and Trussel 2013)。セデック祖語は、この形式の反映形といえるだろうが、*w* の脱落や語末の *l* の付加など説明されるべき点は残る。

¹⁴ 因みに Bullock (1874) に右・左の項目は記録されていない。

¹⁵ 北蕃に対峙するのが、南蕃である。南蕃はブヌン族を指す。

蕃」という名称を用いる。北蕃の中の後山蕃とは現代部族名では、セデック族パラン支族を指す。パラン方言の語彙も少数ではあるが収録されており、「東西南北」も記載がある (伊能 1996:212)。表 2 では、推定音価を [] で補った。それらに対応する現代パラン方言も加えた。

表 2: 伊能 (1897) における東西南北

後山蕃語	現代パラン方言
\bar{i} <i>aiya</i> ¹⁶ [daya?] 「東」	<i>daya</i> 「上手」
<i>taⁿgare</i> [ta-haŋali] 「西」	<i>tu-huŋali</i> 「(もっと遠くの) あそこ」
<i>haⁿgare</i> [haŋali] 「南」	<i>huŋali</i> 「あそこ」
<i>riva^{ká}</i> [ribaq] 「北」	<i>ribaq</i> 「裏山」

「東」は、Bullock の霧蕃語のように、*daya* 「上手」を表そうとしていると予測される。「東」以外は、Bullock の形式とは異なっている。特に、「西」と「南」の形式の類似が目につく。これらは現代パラン方言で、遠い場所を指す指示詞として用いる表現である。伊能 (1996) の「南」は、現代パラン方言の *huŋali* 「向こう側、もっと遠く」に相当し (伊能の資料からは *haŋali* と推定される)、「西」は、この *haŋali* に、接頭辞の *ta-* が付いている。この接頭辞 *ta-* は、小川・浅井 (1935) が受身、落合 (2016) が無意志性を表すとするものである (現代パラン方言では、強勢前の弱化を被るために、*tu-* として現れる)。ここでは、*haŋali* という遠称指示詞に付加して、もう少し遠くの方という意味を表す。いずれにせよ、「西」も「南」も、「あちら、遠くの方」という表現で代替していることがわかる。各方位に特に定まった言い方がないため、西方向も「あちら」であり、南方向も「あちら」であるが、二回同じことを言うのを避けるため、一方では接尾辞を付加して「別方向のあちら」ということを意図したのではないだろうか。

¹⁶ Bullock (1874) にも同源語が記録されているように、*daya* であることは確実なのだが、分節音の *d* がこの表記には現れていない。もしかすると、語頭の \bar{i} は、本来 *l* の上に符号を加えたものだったのかも知れない。現代パラン方言において、*l* と *d* とは区別の困難な語が散見する。

「北」に関しては、方向表現ではなくて、地形を表す名詞「裏山」で代替している。伊能が、北を指して「あちらの方角はなんと言うか」と尋ねたときに、それがちょうど、裏山のある方角に面していたのであろう。Bullock (1974) では、右・左・上手・下手を用いた。伊能では *daya* 「高いほう」が、Bullock と共通に「東」に用いられているのみで、ほかは指示詞や地形名詞を用いる。この二つの文献のみの比較からも、南北を表す語が一定ではないことが読み取れる。

4.3 佐山 (1917) における霧社蕃語

本書は、台湾の日本統治時代 (1895-1945) に、臨時台湾旧慣調査会という機関が、各台湾先住民族について人類学的な調査を行った記録である。セデック族も含まれるが、本書では紗績族と呼ばれている。セデック族の 3 支族のうち、南投廳 (現在の南投縣) における 3 支族 (霧社蕃、^{タウダー} 韜佗蕃、^{トロック} 卓犖蕃)、と花蓮港廳 (現在の花蓮縣) における 3 支族 (^{タロコ} 太魯閣蕃、^{タウサイ} 韜賽蕃、^{モックイ} 木瓜蕃) について記載している。南投縣側のセデック族 3 支族の一派は、約 350 年ほど前に中央山脈を越えて花蓮縣側に移住し、新たな集落を築いたという歴史がある (馬淵 1954)。霧社蕃が木瓜蕃の旧居住地、韜佗蕃が韜賽蕃の旧居住地、卓犖蕃が太魯閣蕃の旧居住地に当たる。このうち霧社蕃がセデック族パラン支族である。

本報告書は、付録において 6 支族 (8 集落) の 208 項目の語彙をカタカナ表記で記録している。その中に、「東」と「西」が含まれる。「北」と「南」は項目として挙げられていない。また、本報告書は最近になって、台湾の中央研究院民族学研究所が中国語に翻訳する作業を行い、2011 年にセデック族の部が出版されている (劉編 2011)。本翻訳書において、カタカナ表記であったセデック語の単語は、現代の発音によるローマ字表記に移し変えられている。

『紗績族調査報告書』におけるセデック族パラン方言 (霧社蕃) の形式と、中国語翻訳本において対応するローマ字表記を表 3 に示す。報告書のカタカナは、筆者が当時の発音を推測しローマ字表記に直した。劉編 (2011) における現代ローマ字表記は次末音節以前の中和母音を書かない方針であるが、それを筆者が [] で補った。

表 3: 佐山 (1917) における東西と現代表記版

	「東」	「西」
霧社蕃語	ボボアンヒーダウ [bawbaw-an hidaw]	ラカヤンヒーダウ [rəqiy-an hidaw]
現代ローマ字表記 (劉 2011)	<i>bbuwan hido</i> [bubuwan hido]	<i>gqiyan hido</i> [guqiyan hido]

セデック語パラン方言は、1920年代から1960年代にかけて一連の音変化を被っており、その一例が、語末二重母音の単母音化である(落合2015)。ローマ字化されたセデック語は変化後の、現代の発音を反映している。『紗績族調査報告書』が発行された1917年当時の発音は古い特徴を保っている。

佐山の記録した「ヒーダウ」は太陽の意味である。Asai (1953) は1927年に行ったセデック語パラン方言の文法書であるが、ここでも *hidaũ* などと語末二重母音で記されている。現代パラン方言では語末二重母音の単母音化 (*aw > o*) により、劉編 (2011) に見られるように *hido* となる。次に、「東」という語に含まれるボボアンであるが、これは「上」という語に由来する。Asai (1953) において、「上」は *boũboũ* などと記されている。二重母音の単母音化を被っていないタロコ方言では、*babaw* である。このことからセデック祖語として **bawbaw* が再建される。「ボボアン」は、*bawbaw* (あるいは、Asai (1953) のように *bowbow* と成っていたかもしれない) に、場所態現在形接尾辞 *-an* が付されたものである。*bawbaw-an hidaw* で、太陽が上るところ、という意味であろう。

「西」にみられる「ラカヤン」についてであるが、セデック語パラン方言には、まれに *r* と *g* が交替しうる語がある(例: *gupun* ~ *rupun* 「齒」)。このゆれが、ラヤン (*rəqiy-an*) と現代パラン方言の *guqiyan* の間にも見られる¹⁷。

¹⁷ セデック語において *r* か *g* で反映される音素は、オーストロネシア祖語の *R* (有性軟口蓋摩擦音) に相当する (Li 1981)。

まず、現代パラソ方言の *guqiyān* は、*geqi* 「差し込む、挿入する」の場所態・現在時制形である。語幹 *geqi* に場所態現在形接尾辞 *-an* が付くが、それらの境界に起こる母音連続を回避するため、渡り音が挿入される。前部が前舌高母音の場合は *y/j* が挿入される（後舌の場合は *w* が挿入される）ため、ここでは *geqi-an* > *geqiy-an* となり、強勢前の中和により *guqiyān* を得る。現代パラソ方言において、この形式は、*g* と *r* でゆれることはなく、*ruqiyān* とは言わない。ただ、佐山 (1917) の形式を見る限り、当時は、*rəqiy-an* と *gəqiy-an* でゆれていたと予想される。*rəqiy-an hidaw* は、太陽が山脈の稜線に入り込むところ、という意味である。

「東」は、Bullock (1874) においても、1897 年の伊能の調査 (伊能 1996) においても *daya* 「上手」であったが、本文献は、*daya* を用いずに太陽の動きを方位表現に持ち込んでいる。「東」という概念を表すために、新たに作られた表現だろう。「西」も同様、Bullock (1874) における、*hunat* 「下手」や、1897 年の伊能の調査 (伊能 1996) における、*ta-haŋali* 「あそこ」とは異なり、太陽を用いて表現している。

4.4 赤間 (1932) における霧社語

本文献は、序文において「本書は主として霧社語 (セダック語) の速成敏達を期せんが為に編纂したものである…尚本書は専ら明治四十年以来蕃語に在って刻苦勉勵霧社語研究に従事せられたる赤間富三郎君の手に成るものである」と述べている。ここで言う霧社語とは、すなわちセデック語パラソ方言のことである。セデック語パラソ方言について、入門と会話集に分けて例文を示しているほか、付録として単語編も収められている。この単語集の中に、「東西南北」が記載されている (赤間 1932:124)。本書において、表記は、カタカナを用いている。表 4 では、赤間による霧社語の表記と筆者による推定音価を [] で示し、筆者の調査データから現代パラソ方言の対応形を加える。

「東」と「西」については、Bullock (1874) と同様に、セデック祖語 **daya* 「上手」と **hunat* 「下手」に由来する形式を用いている。「東」が *daya* である点は、伊能 (1996) も同様である。「北」と「南」は、伊能 (1996) における「西」「南」と同様、遠称の指示詞 *huŋali* 「あそこ」を用いる。「南」

表4 赤間 (1932) における東西南北

霧社語	現代セデック語パラン方言
ダヤ [daya] 「東」	<i>daya</i> 「上手」
フーナツ [hunat] 「西」	<i>hunac</i> 「下手」
タガリ [ta-haŋali] 「南」	<i>tu-huŋali</i> 「(もっと遠くの) あそこ」
パガリ [haŋali] 「北」	<i>huŋali</i> 「あそこ」

では、これに接頭辞をつけることで表現している。伊能 (1996) では西・南がどちらも「あちら」と呼ばれたが、赤間 (1932) では「あちら」と呼ばれる方角が、北と南という対極をなす方位に変わっている点が興味深い。移川 (1940) による、台湾オーストロネシア諸語は南北を表わす語に欠けるという観察に合致する。

ところで、パガリ「北」に当たる現代パラン方言は、*pa-huŋali* (または *pa-ŋali*) と再現できるが、実際はこのような形式を筆者は耳にしたことがない。因みに、*pa-* は、使役の機能を持つ接頭辞である。さらに、文字の不鮮明のため、「ハ」の右上にあるのが、丸か二重点か判別しづらい。「パ」または「バ」両方の可能性がある。しかし、筆者は「ハ」右上に何かの手違いで印を付けてしまったのではないかと考える。「ハガリ」ならば、*haŋali* に相当する。これは、現代パラン方言の *huŋali* に対応する。

「南」に関して言えば、遠称の指示詞 *haŋali* 「あそこ」に接頭辞の *ta-* が付いている。赤間は「タガリ」と表記しているため、この時代のパラン方言では、まだ *ta-* と発音されていたらしい。この *ta-* が接頭した形式は、伊能 (1996) では「西」、赤間 (1932) では「南」を表している。西・南・北といった方位を指す表現が、その場の状況に応じて随意的に作られていることがわかる。

4.5 移川 (1940) におけるパーラン社方言

先に紹介した移川 (1940) からパラソ方言の東西南北を抜き出して表 5 に示す。東西南北を表す語についての移川の注釈 (方位名称の本来の意義) と現代パラソ方言の形式と意味も加えた。なお、移川の言うパーラン社とはパラソ (霧社) のことである。

表 5: 移川 (1940) のパーラン社方言

パーラン社方言	移川の注釈	現代セデック語パラソ方言
daya 「東」	上方、山手、 上流の方	daya 「上手」
hunat 「西」	麓の方	hunac 「下手」
to-gâli 「南」	彼方	tuhunali 「(もっと遠くの) あそこ」
ho-gâli 「北」	下方	hunali 「あそこ」

移川の東西南北の形式はすべて赤間 (1930) と一致する。赤間と移川の形式を比較して多少音声表記に修正を加えると、東は *daya* 「上手」、西は *hunat* 「下手」、南は *ta-hunali* 「遠くのあそこ」、北は *hunali* 「あそこ」ということになる。

4.6 辜編 (2009) における Tgdaya 方言

本書は、セデック語の三方言 (パラソ方言・トダ方言・タロコ方言) について、身体、親族、食物など意味種別ごとに、数百の単語をリストした語彙集である。ここでは Tgdaya と呼ばれる方言がパラソ方言に相当する (脚注 8 参照)。その中に、「東」「西」「北」の項目があるが、「南」は載っていない (表 6)。本書では、次末音節より前の母音 (中和母音) を記さない方針であるが、本稿では示している。筆者による直訳を 〈 〉 内に示す。

表 6: 辜 (2009) における東西北

「東」	<i>hureyan hido</i> 〈太陽が照る方〉
「西」	<i>guqiyán hido</i> 〈太陽が入り込む方〉
「北」	<i>tugu-baro, tugu-daya</i> 〈上のほう、上手のほう〉

「東」と「西」は複合表現を採っている。セデック語では後部が修飾要素で全部が修飾される要素である。これらの後部 *hido* は「太陽」を意味する語である。

「東」の前部 *hureyan* は、*hiru* 「照る」の場所態現在形である¹⁸。語根に接尾辞 *-an* が付され、さらに母音弱化と母音変化、渡り音の挿入により *hureyan* を得る (*hiru-an* > *huru-an* > *hure-an* > *hure-yan*)。 *hureyan hido* は、「太陽が照る方」という意味である。このように「太陽」を方位表現に導入しているところは、『紗績族調査報告書 (1917)』 (佐山 1917) と同様である。

「北」に関しては、これまでの「右の方」 (Bullock 1874)、「裏山」 (伊能 1996)、「あちら側」 (赤間 1932) のどれとも異なり、この三つの文献において、「東」を現していた *daya* が用いられている。以前の文献では「東」であった *tugu-daya* 「高いほう」が、「北」に方角を変えている。同様の表現として、*baro* 「上」に *tugu-* をつけた *tugu-baro* 「上の方」も用いている。

これまで安定していた表現であった「東」を現す *daya* が「北」に変わったことは、セデック語において東西南北が重要なのではないことを表している。民俗方位の基本に据えられているのは、傾斜の上 (*daya*) か傾斜の下 (*hunac*) かということであり、それは話者の位置の変化によって相対的に変わりうる。

4.7 現代セデック語パラソ方言の東西

これまで安定していた表現であった「東」を現す *daya* が、「北」に変わった原因を考えてみる。セデック族パラソ支族の大部分が 1930 年代に

¹⁸ 著者が調査で得た形式は *huriyan* である。

霧社一帯の旧集落 (海拔千メートル以上) から、台湾中央に位置する埔里という街の北西に位置する低海拔地 (海拔四百メートル強) に移住した。移住後の集落の一つである、グルバン (Gluban) 集落において、*daya* と *hunac* は、現在でも方位表現として用いられ、集落内で高低差のある区画を、*alan daya* 「坂の上の集落」、*alan hunac* 「坂の下の集落」と呼んでいる (*alan* 「集落、村」)。これらの区画を、無理やり東西南北に当てはめるなら、*alan daya* は北に、*alan hunac* は南に位置している。しかし、*daya* は、高低差がある場合に高い方を指す言葉であり、条件が合えばどのような場所にも適応できる。海拔の低いグルバン集落に住む人には、霧社は目には見えない。しかし、霧社は海拔の高い所にあるという知識と経験から、霧社方面を *daya* と呼ぶ¹⁹。この場合の、*daya* は、東西南北に無理やり当てはめれば「東」に当たる。

筆者は 2015 年 11 月、セデック族パラソ支族のグルバン集落において、方位について 30 分ほど聞き取りを行った。調査協力者は、グルバン集落出身でグルバン集落在住の 70 代前半の女性と、パラソ支族ナカハラ (Nakahara) 集落出身でグルバン集落在住の 70 代後半の男性である。その結果は、『紗績族調査報告書』(佐山 1917) と全く同じであった (表 7)。協力者の両人から東は *bubuw-an hido* 「太陽の昇るほう」、西は *guqiyān hido* 「太陽の入り込むほう」、という表現を得た。ただし、「北」と「南」については、しばらく考え込み、「*icin* (別のほう) は、どういふか?」、「*narac* (右)、*irin* (左) と昔、言っていたような気がするけど、どっちを指すかわからない」など言葉を交わし、最終的には、「わからない」が結論であった。

¹⁹ また、山の斜面など、傾斜のあるところに付けられた道がある場合、道の両側のうち、高低差の高いほうを *daya elu* と呼び、低いほうを *toma elu* と呼ぶ (*toma* 「下」、*elu* 「道」)。

表 7: 現代セデック語パラソ方言の東西

東	<i>bubuw-an hido</i> 「太陽の昇るほう」
西	<i>guqiyān hido</i> 「太陽の入り込むほう」
南	---
北	---

4.8 先行研究における方位表現のまとめ

6つの文献と筆者の調査によるセデック語パラソ方言の東西南北を表8に示す。

表 8: セデック語パラソ方言の東西南北

	東	西
Bullock (1874)	<i>daia</i> [daya]	<i>hunat</i> [hunat]
伊能 [1897 調査]	<i>ī aiya</i> [daya ?]	<i>taⁿgare</i> [ta-haŋali]
佐山 (1917)	ボボアンヒーダウ [bawbaw-an hidaw]	ラカヤンヒーダウ [rəqiy-an hidaw]
赤間 (1932)	ダヤ [daya]	フーナッ [hunat]
移川 (1940)	<i>daya</i> [daya]	<i>hunat</i> [hunat]
辜編 (2009)	<i>hureyan hido</i>	<i>guqiyān hido</i>
筆者 [2015 調査]	<i>bubuw-an hido</i>	<i>guqiyān hido</i>
	南	北
Bullock (1874)	<i>tagaērīl</i> [taga-iril]	<i>tungarēt</i> [taga-narat]
伊能 (1897) [1996]	<i>haⁿgare</i> [haŋali]	<i>riva^{ká}</i> [ribaq]
佐山 (1917)	---	---
赤間 (1932)	タガリ [ta-haŋali]	パガリ [haŋali]
移川 (1940)	<i>to-gāli</i> [ta-haŋali]	<i>ho-gāli</i> [haŋali]
辜編 (2009)	---	<i>tugu-baro, tugu-daya</i>
筆者 [2015 調査]	---	---

「東」は、4つの文献 (Bullock 1874、伊能 1996、赤間 1932、移川 1940) において、*daya* 「上手」、残りの2つで *bawbaw-an hidaw* 「太陽の上るところ」 (佐山 1917)、*hureyan hido* 「太陽の照るところ」 (辜編 2009) と表現されている。

「西」は、3つの文献 (Bullock 1874、赤間 1932、移川 1940) において、*hunat/hunac* 「下手」、2つの文献 (佐山 1917、辜編 2009) において、*rəqiy-an hidaw/guqiy-an hido* 「太陽の入り込むところ」、残りの1つ (伊能 1996) において、*ta-huŋali* 「あそこ」と表現されている。

「南」は、Bullock (1874) において、*taga-iril* 「左側」と表されている。伊能 (1996) において、*haŋali* 「あそこ」、赤間 (1932) と移川 (1940) も類似の *ta-huŋali* 「あそこ」と表している。

「北」は、Bullock (1874) において、*taga-narat* 「右側」と表されている。伊能 (1996) においては、*rihaq* 「山の裏側」と表す。赤間 (1932) と移川 (1940) に見られる語は、*haŋali* 「あそこ」と推定される。辜編 (2009) では、*tugu-baro* 「上側」、*tugu-daya* 「上りの方向」と表している。

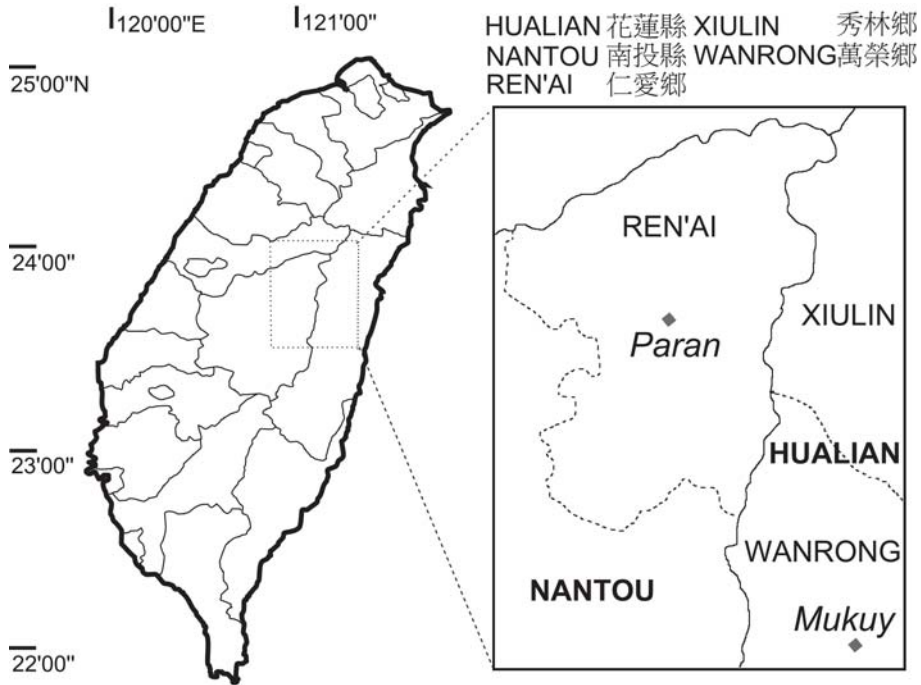
これら東西南北の表現が、6つの文献を通して一定せず、「右」「左」という方向を表す語、「あそこ」といった指示詞や、太陽を用いた複合表現、「山の裏側」という地形を表す語を使っている。セデック族にとって方位の判断に重要なのは傾斜の高低差であり、上手は *daya* (セデック祖語 **daya*)、下手は *hunat* (セデック祖語 **rahit*) と表す。セデック語の民俗方位の軸は、傾斜の高低の二極である。

5 事例：中央山脈を越えたパラソ支族の「東」と「西」

ここまでセデック語パラソ方言の方位は傾斜を基本とすることを述べた。セデック語パラソ方言は、台湾を南北に貫き、3000メートルを超える山頂をもつ山脈がひだのように重なり合う、中央山脈の西に位置している。この山脈を越えて、東へ移住したセデック族パラソ支族の一派は、木瓜蕃 (Mukuy) と呼ばれ、パラソ方言の亜種を話す。この亜種をここでは、ムックイ方言と呼ぶ (図2)。

中央山脈をはさんで、傾斜は逆転する。西側では、頂上へ向かって東へ

図2 パラン集落とムックイ集落



行くほど海拔が高くなる。東側では、頂上へ向かって、西へ行くほど海拔が高くなる (図2において南投縣と花蓮縣の堺がおおよそ山の稜線に当たる)。中央山脈の東に住むムックイ支族と、西に住むパラン支族の位置の違いにより、方位表現にどのような違いが現れるか興味深いところである。

『紗績族調査報告書』(佐山 1917:付録 140)に、ムックイ方言(木瓜蕃)の「東」と「西」がカタカナ表記で収められている。表9に、この文献に見られるムックイ方言の東西(佐山 1917)とパラン方言(赤間 1932)の対照を示す。カタカナ表記は、本稿筆者が [] 内に、推定音化を補った。

表 9: ムックイ方言とパラソ方言の東西

	東	西
ムックイ方言	フナツ、ホナツ [hunat, honat]	ダヤ [daya]
パラソ方言	ダヤ [daya]	フーナツ [hunat]

表 9 では、東西が逆転していることがわかる。ムックイ方言の表すところの、*daya* 「西」と *hunat* 「東」は、パラソ方言の *daya* 「東」と *hunat* 「西」となっている。話者の位置によって *daya* が、東にも西にも用いられ、同じことが *hunat* にも言える。移川 (1940:127) が台湾オーストロネシア諸語の方位名称を概観して言うように、「民族の移動に伴ひ、或ひは占居地域の地形及びその他の原因に因つて、同一種族内に在りながら地方的相異を生み、又方位観念と方位名称とが一致を缺く結果を生むことも亦あるのである²⁰。」中央山脈を介して東西の表現が逆転することからしても、セデック語パラソ方言の民俗方位の軸は高低差によって決まることがわかるだろう。

6 おわりに

セデック語パラソ方言の方位表現を 1874 年から 2016 年現在まで時代を追って眺めてきた。これらの調査資料を統合すると、方位の軸となるのは傾斜であり、上手が *daya*、下手が *hunac* で表現されると言える。これらはオーストロネシア祖語の **daya* 「内陸方向」と **lahud* 「海の方角」に相当する語である。Kern (1889) はマラヨ=ポリネシア族の **daya* 「内陸方

²⁰ 移川 (1940:136, 130) はセデック語タロコ方言の東西も記録している。タロコ集落はムックイ集落と同様に中央山脈の東に位置する。タロコ方言においても西を *daya* と言う。東は「*poso* 本の意、日の本」を用いるという説明がある。

向」と **lahud* 「海の方向」について以下のように述べている²¹。

・・・一つの実事がある。それは、方位の一つを「海の側」と言い、その反対の方位を「内陸または高地」と呼ぶ、マライ・ポリネシア族に広くゆきわたっている習慣である。この相対的な方位感覚を示す言語習慣は、マライ・ポリネシア族がまだ一つの民族—これがまた多くの種族に分かれていたであろうが—から成り立っていた古い時代にその起源を求めねばならないほど、彼等のあいだに深く根をおろしているものである。

マラヨ＝ポリネシア族の民俗方位の習慣は、セデック族においても陸地の傾斜として適応され、彼等のあいだに深く根をおろしている。

参考文献

- Adelaar, Alexander (1997) An Exploration of Directional Systems in West Indonesia and Madagascar. In Gunter Senft (ed.) *Referring to Space: Studies in Austronesian and Papuan Languages*, 53-81. Oxford: Clarendon Press.
- 赤間富三郎 (1932) 『セーダッカ蕃語集』台中市: 台中州警務部。
- Asai, Erin (1953) *The Sedik Language of Formosa*. Kanazawa: Cercle Linguistique de Kanazawa.
- Blust, Robert (1999) Subgrouping, Circularity and Extinction: Some Issues in Austronesian Comparative Linguistics. In Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li (eds.) *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, 31-94. Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office), Academia Sinica.
- Blust, Robert, and Stephen Trussel (2013) *The Austronesian Com-*

²¹ 倉田 (1972:123) に引用されている。Kern の同論文は渋沢元則氏による日本語訳があるということであり、ここでの引用も渋沢氏の訳によると思われる。

- parative Dictionary: A work in progress*, web edition.
<http://www.trussel2.com/acd/>. Retrieved 2015/11/05.
- Bullock, Thomas L. (1874) Formosan Dialects and Their Connection with the Malay. *China Review, or Notes and Queries on the Far East* 3: 38-46.
- Dempwolff, Otto. (1934, 1937, 1938) Vergleichende Lautlehre des Austronesischen Wortschatzes, 3 vols. *Beihefte zur Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen* 15, 17, 19. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- 伊能嘉矩 (1996) 《台灣踏查日記<上>》[楊南郡譯] 台北: 遠流。
- 合田濤 (1977) 「方位名と方位観—ボントック族をめぐる—」『日本民族と黒潮文化—黒潮の古代史序説—』東京: 角川書店。
- 辜雯華編 (2009) 《賽德克民族族語圖解辭典》南投市: 南投縣原住民族行政局。
- Kern, H. (1889) Taalkundige Gegevens ter Bepaling van het Stamland der Maleisch-Polynesische Volken. *Verspreide Geschriften* 6 (1917). Den Haag: Martinus Nijhoff.
- 倉田勇 (1972) 「「民俗方位」の一考察」『天理大学学報』82: 49-68.
- Li, Paul Jen-kuei (1981) Reconstruction of Proto-Atayalic Phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 52: 235-301.
- 劉璧榛主編 (2011) 《蕃族調查報告書 4: 賽德克族與太魯閣族》[臺灣總督府臨時臺灣舊慣調查會原著]. 臺北市: 中央研究院民族學研究所。
- 馬淵東一 (1954) 「高砂族の移動および分布」『民族学研究』18 (1-2): 123-154, 18 (4): 23-72.
- 落合いずみ (2015) 「セデック語パラン方言の二重母音について」『日本語学会第150回大会予稿集』: 392-397. 京都: 日本語学会。
- 落合いずみ (2016) 「セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究」京都大学博士論文。
- Ochiai, Izumi (2016) Bu-hwan Vocabulary Recorded in 1874: Comparison with Seediq Dialects. *Asian and African Languages and*

Linguistics 10: 287-324.

小川尚義 (1944) 「インドネシア語に於ける台湾高砂語の位置」平野義太郎 (編) 『太平洋国一民族と文化』, 太平洋団学術叢書上巻: 451-502. 東京: 河出書房.

小川尚義・浅井恵倫 (1935) 『原語による台湾高砂族伝説集』台北: 台北帝国大学言語学研究室.

佐山融吉 (1917) 『蕃族調査報告書: 紗績族調査報告』台北: 南天書局.

Swellingrebel, J. L. S. (1960) Introduction, In W. F. Wertheim et al. (eds.), *Bali: Studies in Life, Thought and Ritual*, vol. 1, V [Selected Studies on Indonesia], 1-76. The Hague: W. van Hoeve.

移川子之藏 (1940) 「方位名称と民族移動並びに地形」『安藤正次教授祝賀記念論文集』127-154. 東京: 三省堂.

移川子之藏・宮本延人・馬淵東一 (1935) 『台湾高砂族系統所属の研究』台北: 台北帝国大学土俗人種学教室.

楊秀芳 (1976) 「賽德語霧社方言的音韻結構」『中央研究院歷史語言研究所集刊』47: 611-706.

Folkloric System of Direction in Paran Seediq – Slope as its Axis –

Izumi OCHIAI
Kyoto University

Abstract

It is said that many Formosan languages use ‘uphill’ and ‘downhill’ as directional expressions. It is also suggested that the mountain range that runs from north to south causes the difference of directional expressions in the east side and west side of the mountain. This paper examines directional terms in the Paran dialect of Seediq (Atayalic, Austronesian), from six previous studies with publication dates ranging from 1874 to 2009, as well as providing the data from the author’s fieldnotes. The cardinal directions are either expressed by *daya* ‘uphill’, *hunat* ‘downhill’, *taṅali* ‘there’, *narat* ‘right’, *irin* ‘left’, or the compounds with the word for ‘sun’. These words do not show clear correspondence among these studies. For example, ‘there’ can refer to the north, west, and south. However, *daya* ‘uphill’ and *hunat* ‘downhill’ seem to be rather stable expressions referring to the east and west. It can be said that a slope plays a role of the axis of the directional expressions. One group of Paran tribe who migrated to the east side of the mountain reversed the use of these words, so that *daya* refers to the west and *hunat* refers to the east.

Keywords: Formosan languages, Seediq, geography, directions